

B—36 Anthocyan 色素の染色性について

県立新潟女短大 山崎 光子

1. 身近かに広く分布している Anthocyan 系植物は古い時代も、現在の工芸染色にもあまり利用されていないが、Anthocyan 色素は pH を充分下げ、安定な塩化物とすれば加熱にも耐え得ることに着目し、その方法で染色した場合どのような色相になるか。また、金属塩類やフィックス剤・タンニン酸などの後処理による色相はどうか。更に、それぞれの染色堅ろう度について比較検討してみた。

2. 試料は Shisonin を含む“ちりめんじそ”の葉を用いた。浸出液は 1% 塩酸溶液を試料の 50 倍量とり 98°C,

30分でつくり、試料と同量の白絹布を浴比1:50, 98°C, 30分の条件で染色した。後処理は濃度を3水準にわけ、浴比1:50, 60°C, 30分で、金属塩類、フィックス剤・タンニン酸など16種を使用した。判定は東京電色の測色色差計を用い、主波長、色差を求め、染色堅ろう度はJIS規格にもとづいて行なった。

3. その結果、後処理しない染色だけの場合は赤系統の色、後処理した場合は、タンニン酸、金属塩類、フィックス剤によって、それぞれ、赤、紫赤、紫青、緑黄系統の色に発色した。染色堅ろう度は、洗たくに対しては、赤、紫赤色は変退色したが、緑黄色の堅ろう度は高かった。熱湯、水の堅ろう度は、洗たくの場合より優れていた。耐光堅ろう度は全般に低く、摩擦堅ろう度は、いずれも堅ろう度が高いが、フィックス剤を用いたものは、やや劣った。